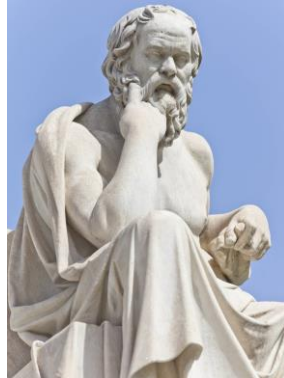


『Mind Charging』

第 56 回 発行：入試広報室 発行日：令和 2 年 6 月 15 日

ソクラテスの名言



Thou shouldst eat to live; not live to eat.

生きるために食べよ、食べるために生きるな。

人間にとって『食べる』ということは、最低限の『生命活動』と言えます。もちろんこれは最低限であり最重要であることは間違いないわけですが、とても幸せなことに、私たちは食べる・食べられることに対して『当たり前』という認識でこれまで生きてくることができています。そういう意味で私にはこの言葉について 2 つの意味を感じます。

まず、一つ目には『別に食べられればそれでいいよ』と、最低限だけを確保して自己への挑戦を諦めるのではなく、いわゆる『人間だからこそその生き方を追求していきましょう』というメッセージとして、自分の夢や興味があることを追求したり、常にアンテナの高さを保つことの大切さを説いているように感じます。

二つ目は、『世界中の貧困をなくそう』というメッセージが隠されているように感じます。私たちと違って満身に食べられず、餓死してしまうような環境下で生活している人々は、文字通り『食べるために生きている』ということであり、食べるために生きる”しかない”状態ということです。日本を含め、世界には食べきれなかった大量の食物が処分されている国があり、それが世界中に渡れば、餓死してしまう人はいなくなるとも言われています。当たり前なんてないということを改めて感じます。

様々なことを考え、生み出すような活動ができるのは人間の特権です。当たりのレベルが上がれば、世界中の人々が高い幸福度の中で暮らしていくことができる世界になるといいですね。(編集委員：入試広報室 鈴木)

ソクラテス(希: Σωκράτης、ラテン語:Socrates、紀元前 469 年頃 - 紀元前 399 年)は、古代ギリシアの哲学者である。長母音を発音するならソークラテース。妻は、悪妻として知られる、クサンティッペ。ソクラテス自身は著述を行っていないので、その思想は弟子の哲学者プラトンやクセノポンなどの著作を通じ知られている。父は彫刻家ないし石工のソプロニスコス、母は助産婦のパイナレトとされる。アテナイに生まれ、生涯のほとんどをアテナイに暮らした。彼はペロポネソス戦争において、アテナイの植民地における反乱鎮圧としてのポテイダイア攻囲戦、ポイオティア連邦との大会戦デリオンの戦い(英語版)で重装歩兵として従軍した(アルキビアデスは騎兵として参加、当時の回想が『饗宴』に書かれている)。青年期には自然科学に興味を持ったとの説もあるが、晩年は倫理や徳を追求する哲学者としての生活に専念した。(Wikipedia 参照)